島根県立三刀屋高等学校 掛合分校
校長発『ほんりゅう』 【6月号】令和5年6月9日

■私が先生になったとき

生徒の皆さんと他愛もない雑談をしていると「先生ってなんで先生になったんですかぁ？」と聞かれることがよくあります。そんな場面での会話は、お互いリラックスして話をすることができるので少し照れくさいと思うことでも話しやすい場合があります。

私が教員になりたいと思ったのは、自分が中・高生の時に悩んでいたことや迷っていたこと、あるいはこうすればよかったなぁと過ぎてから感じたことを、人生の先輩として今後“その時”に直面する後輩の皆さんに伝えたいという気持ちがあったからです。ただ、今思うとピーターパンのように大人の世界に飛び込むのが怖くて、学校という子どもの世界にずっといたいという気持ちがあったのかもしれません。

こう答えると、生徒の皆さんからは「アツいですね（笑）」的な反応が返ってきます。雑談の中ですから、それに対して私も「まぁね～（笑）」という感じで返します。半分冗談の軽い感じの会話のようにみえますが、それはお互い表面的な照れ隠しにすぎず、案外真面目なやり取りがその奥にはあるものです。このようなシチュエーションだからこそ、リラックスして相手の言葉を受け容れやすいのかもしれません。そして、真剣に伝えると必ず相手の心に響くものです。

親子の関係性もこれと似ているところがあると思います。お互い照れくさくてなかなか正面から会話ができないことってありますよね。当然ですが、大人の誰しもが中・高校生時代を経験してきています。親として構えずに、雑談や日常会話でのちょっとした中に人生の先輩としての経験談を交えていくと、子どもの心に響くと思います。独り言をいう感じで十分です。きっと子どもは受け止めてくれます。子どもにとって、親こそが最も身近な人生の先輩なのです。

教員になってからずっと机上に置いていた詩があります。教職に就いた初年度に目にした教育雑誌に掲載されていた詩です。その当時は宮沢賢治の作品といわれていました。（その後作者は不詳という説が有力となりました。）心に迷いが生じそうになった時は見るようにしていました。生徒に言う以上は、教員である自分も率先してしなければいけないと自分に言い聞かせていました。この詩の「先生」の部分を「親」に置き換えて考えてみてはいかがでしょうか？

本当のことが語れる自分、明日のことが語れる自分、夢が語れる自分、胸を張れと言える自分、仲良くしろと言える自分、ガンバレ、ガンバレと言える自分、勇気を出せと言える自分―そんな自分で私はありたい。いやちょっとアツいですね（笑）

私が先生になったとき
宮沢賢治

私が先生になったとき
自分が真理から目をそむけて
子どもたちに
本当のことが語れるのか

私が先生になったとき
自分が未来から目をそむけて
子どもたちに
明日のことが語れるのか

私が先生になったとき
自分が理想を持たないで
子どもたちに
いったいどんな夢が語れるのか

私が先生になったとき
自分に誇りを持たないで
子どもたちに
胸を張れと言えるのか

私が先生になったとき
自分がスクラムの外にいて
子どもたちに
仲良くしろと言えるのか

私が先生になったとき
ひとり手を汚さず自分の腕を組んで
子どもたちに
ガンバレ、ガンバレと言えるのか

私が先生になったとき
自分の闘いから目をそむけて
子どもたちに
勇気を出せと言えるのか